
メフィストの夢

レイアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メフィストの夢

【Nコード】

N8968V

【作者名】

レイアン

【あらすじ】

人は定められた運命に逆らうことはできない。

だとしても、俺は抗いたかった。

大切な人が死ぬという一つの運命に。

だから、誓った。

メフィストになるのだと。

ブログ 壊れた世界（前書き）

今、初めて読んだという方は、この前書きに関しては前々から読んで頂いていた方に対するものなので、飛ばしていただいて結構です。旧第一幕についてですが、新人賞に投稿するため、一時的に削除させてもらいました。

作者の勝手な都合で作品を消してしまうこと、申し訳ありません。旧第二幕につきましては、投稿する第一幕がなくても、読めるような形にリメイクして、掲載していきたいと思っています。

ブローグ 壊れた世界

魔法。日常で使われている魔法というのは何をエネルギーとして使っているのか。それは、今でも分かってはいない。

だが、仮説は立てられていて、有力なものとして世界に知られているものがある。

それが、これだ。

人間にはもともと、魔法を使うためのエネルギー存在しており、それは、人間に宿るそのエネルギーの変換機能みたいなもので、魔法として外部に放出している。

だが、あくまで、仮説であって、実際はどうかかわからない。

というより、間違っていると俺は思っている。

それはなぜか。

そう思った原因の一つは、この世界で起こる魔法使いの暴走事件によるものである。この事件は、魔法使いが魔法を使うと、その魔法の制御が利かなくなり、魔法使い自身も抑えようとするものの、すぐに自我を失い、暴れるというものだ。

つまりは、魔法使いが自身の魔力を扱えなくなったということだ。

この事件の上で問題となってくるのは、人間に本当にエネルギーがあつて、それを自分の体で変換しているのかということについてだ。もし、人間自身の体で変換しているのなら、魔力の調整は暴走状態に入ったとしても、制御出来なくてはならない。これに関しては、その役割を果たす部分が異常を起こしたで、済むかもしれないが、それにしても、人数が多すぎるのだ。

それに、その事件のときに観測された魔法使いから放出される魔力の量は人間の体から放出することが出来る量の限界をはるかに超えている。

その魔力の量と言うのは、人間の変換機能がいくら良かったとしても、人間の活動及び蓄積されたエネルギー以上のものは変換できな

いということからわかっている。

それから、考えると、人間にそもそも、そんな変換機能がついているのかという話になるのだ。

俺の仮説としては、魔法のエネルギーはこの人間の住む世界とは別の所にあつて、それを人間の言葉や術式で変換しているのではないかと思っっている。

その考えに至ったのは俺の繰り返された世界の中で、マリアを救い、王となった俺が研究し、理論を確立していたからである。

それなら、仮説ではなく、理論になるはずだが、あくまで、あそこはメフィストの夢という現実とは違う世界である。それに、研究に使える費用が段違いだ。

そのような理由で、現実で調べられていない。だが、結局のところ、そうだと思うので、別に改めて調べようという気がしない。

だが、そこで、もう一つの疑問だ。なら、その大いなる力に対して、対価はどのようなものなのか。

これが、この事件の本質にあたると俺は考えている。

おそらくは、魔法を使うための対価は人間が支払っており、それが人間の持つ精神力なのではないかと俺は考えている。

それなら、うなづけるのだ。大きすぎる魔法を使って暴走したという例に関しても、魔法の使いすぎでの場合に関しても。

そして、魔法をある程度の使用量であれば、永遠に使えることに ついても。

大きすぎる魔法は、それに耐えうる精神力がその人になかったため、魔法の多用は、その人の精神力の上限を超えてしまったため、永遠に使えるのは、精神力が自然治癒するためだ。

そんな原因は結局のところ、どうでもいいのだが、そのようにして精神力を失った魔法使いがこの大陸の中央にある一国の王都で同時に八人暴走し、王都が崩壊した。

その後、壊滅した王都周辺で八匹の化け物が現れた。その化け物は周囲の町や村を襲っては壊滅まで至らし始めた。

それが俺が現実に戻ってくる一ヶ月前のこと。一ヶ月がたった今では、この大陸に存在する確認されている限りの町や村のうち三分の一が壊滅した。

それが、マリアを救い、帰って来た俺に待つ現実だった。

この家に関しても、襲撃を受けたのは例外ではなく、一匹による襲撃を受けた。

その化け物は体のどこからでも、自由に腕を瞬時に、何本も出せる上に、魔法が使用できた。さらに、魔法を発動するためのラグはないときていた。

本当の化け物なのだ。

とりあえず、ラグがないというのが有り得ない。だが、マリアやガイアスが確認した限り、術式も詠唱した様子もなく、例えば腕を向けた方向に突然業火がとかいうことだったらしい。

そもそも、迎撃をガイアスとマリアがしたにもかかわらず、ギリギリだったのだ。なんとか倒すことが出来たものの、ガイアスは腕を持っていかれ、重傷。マリアは体の一部が飛ぶなどということはなかったものの、重傷であったという。

はつきり言って、信じられなかった。あの二人ですら、その傷を負って、一匹ということに。

だが、それが現実なのだと思った今なら、この世界の現状にもうなづける。

だが、それも、ここで終わらせる。

マリアを死に至らしめたやつらを生かしておくわけにはいかない。

俺はマリアの笑顔を守ると決めたのだから。

プロローグ 壊れた世界（後書き）

第一幕についてですが、そろそろ大規模な編集を行い、編集をした作品をどこか新人賞に投稿したいと思います。そのため、一時的に削除させてもらいます。

作者の勝手な都合で消してしまうこと、申し訳ありません。

第二幕につきましては、投稿する第一幕がなくても、読めるような形にリメイクして、第一幕として、掲載していきたいと思っています。

これからもメフィストの夢をよろしくお願いします。

人であることを捨てた者

男は城の屋根から眺めていた。そう、いたるところで、炎が上がり、悲鳴が聞こえ、今にも駄目になってしまいそうな街を。

「めんどくさいねえ、だけど、見過ごすわけにはいかないかなあ。」
そう言つて、腰を上げ、立ち上がる。状況は単純。化け物が二体攻めてきた。そう、巷を騒がせているあの化け物が。軍が魔法使いや兵士を総動員しているようだが、止めることは出来ず、この有様となると、軍はもうほとんどの戦力を失ったのかもしれない。
だが、それも当然のことに思える。

そもそも、一つの軍隊程度で敵う相手ではないのだ。もとは人間であつたが、今は悪魔という化け物になつてしまつた者。魔法の暴走により、人間であることをやめざるおえなかつた者。

それが、やつらの正体だつた。そう、俺の眼には映つた。

そんなやつらだからということ、同情はしない。それが、彼らの選んだ道だからだ。同情というのは彼らの道を否定することに他ならない。だとしても、俺には俺の進むべき道がある。やらねばならないことがある。

そのための邪魔になるのなら、彼らにはここで、消えてもらわねばなるまい。

「西も東も、だいぶ、突破されちゃつてるなあ。仕方がないから、同時に潰すか。」

精神を安定させる。そして、心の中にある水面に対して、一滴の水滴をたらす。それが、この術の感覚。体に対してアクセルを踏む感覚。

その一滴で、体の中で莫大なエネルギーの反応が起こる。

これは、人とは異なる力。人には受け入れることの出来ない力。そして、俺が人であることをやめた力。

この力は、大まかに言つと、禁法に近い。だが、もともと実験で体

に宿しているものとは違う。禁法と同じように、これも体に対する代償が大きい。だが、代償はすでに、払い終えた。

その代償ゆえに、人間をやめた。俺は心を代償とした。俺にはもう心がない。表に出すことが出来るのは仮面によって作られた感情。だが、その代わりに人ではない力を手に入れた。あの頃の無力な俺には守ることが出来なかった彼女と最後に交わした約束を果たすだけの力を。

その力を使い、今は彼女が好きだった街を守る。

そうして、俺は二つに分裂した。お互いに均等な力を持ち、お互いが繋がった意識で動く俺に。

そして、瞬時に移動する。一方は西の化け物の居場所へ、もう一方は東の化け物の居場所へ。

先に化け物と接触したのは西に向かったほうだった。移動といっても、魔法なので一瞬で移動できるわけだが。

「ロ・・・ロドス・・・？」

そう声をかけてくる、勝つことの出来ない化け物と対面し絶望し青ざめた顔をしている兵士がいた。それは、昔からの友人であり、同じ階級としてともに過ごしたことのあるテルだった。

「よつ。ひさしぶりだねえ。君はもうここを下がってくれていいよ。この化け物は僕が殺るから。」

「だが。そんな化け物お前一人じゃ無理だ。お前一人おいていくことなんて出来るか。」

本当はそんな強気な言葉を出せるような体の状態ではないのに、大声で本音をぶつけてくる。だが、そんな優しい彼の言葉を俺は本当の意味でありがたいともうれしい思えない。だが、そうだとしても、俺は言葉を綴る。

「行けよ、テル。だからこそ、お前に援軍を呼んでもらいたい。」

「なら、俺が残ったほうが。」

「いや、僕が残らないと援軍を要請するための時間すら稼げないかもしれないからな。だから、言うことを聞いてほしい。行ってくれ。」

「そう言うと、まだ納得できないような顔だったが、「すぐ戻るからな。」とだけ言い残して走っていった。

無論、援軍が必要などというのは、テルを無事に本部まで送りつけるための口実で、本来、必要はない。

テルが化け物と俺との戦闘に巻き込まれないほどの距離まで移動したのを確認して、気合を入れる。

もう、スイッチは入っているから、後は動かすだけ。

「さてつと。君には死んでもうよ。」

そう目の前にいる腕が四本生えていて、眼が六個ある人型の化け物に告げる。

一方、東のほうは、俺がついた頃には、もう決着がついていた。この国の群如きじゃ話にならないと思っていたから、驚く。まあ、俺も一応、国の魔法使いであるわけだが。

だが、そこにいたのは、予想外な人物だった。

「なんで、お前らがいるんだ・・・？ミラ、それにアリシア・・・。」

「それは、昔魔法について手ほどきした、弟子の二人であった。手ほどきなんてレベルではない。あいつらはこの人ではない力を使わない俺に魔法の技術は勝ってから、出て行った。そんな優秀なやつらなのだ。」

出て行ったのが、七年前だから、それだけ成長していてもおかしくはないのだ。

「よつす。師。」

「お久しぶりです。師匠。」

「昔に比べて、成長しているな・・・。まあ、だからこの化け物も倒せたんだろうけど。来てるなら、言ってくれよ。わざわざ、こっちに来なくても良かったんだから。」

化け物を無傷で倒している二人。そんな姿を見て、俺はそう力なく呟くことしか出来なかった。

封じるべきもの

そんな穏やかな再会が行われている東の方とは違って、西では化け物と対峙していた。

俺は、銃を構える。銃弾は計六発。そのうち、俺の自作がいくつか含まれている。中には、こいつを一撃で殺せるものもある。

だが、それは最悪の事態の保険であり、使うつもりはない。いや、使えないといった方が正しいかもしれない。

それは、威力が強すぎるのだ。街ひとつは裕に吹き飛ばせるし、もしかしたら、この大陸をも消し飛ばすことが出来るかもしれないほどのものなのだ。

銃弾自体がもはやエネルギーの塊。それが、俺がたまに作る品だ。魔法を浸透させて銃弾を作るのは俺の中では当たり前なのだが、中でも、複合魔法を浸透させることに成功したものは、少ない。その数少ない貴重なやつを今回持参している。その成功したもののの中でも、今回は十の魔法を複合しているものである通称神殺しの光と呼ばれるものを保持している。

一般的に見て、一つの魔法をつけることが出来るようになるのは、ベテランクラスで、二つ複合させることが出来るのは、それこそ天才のレベルで、三つ目以降は人間じゃ成しえない物とされている。だが、そんな表での常識とは裏腹に適当に作ったら、出来てしまったのだ。まあ、出来れば、試射してみたかったので、この戦いで使えたら使えたで、幸運なのだが。

そんなことを考えていると、化け物が一瞬にして、目の前から消えた。だが、俺にはどこにいいのか容易に分かる。

後方、俺の真正面から左の路地にかけて、二十三度の位置か。

敵を認識し、仕留めるための攻撃ポイントを定めたところで俺の体は、動き出す。足を後ろに向かって踏み込み、体をその勢いを利用して反転させ、撃ち込む。だが、まだそこには、化け物の姿はない。

だが、あそこでターンを仕掛けてくるはずだ。

速度は大したものだが、まだまだ甘い。

そうすると、予想通り現れる。向こうはそのおぞましい顔を一瞬だけ引きつらせると、それを不気味な笑みに変え、銃弾の直撃位置に当たる部分の胸に大きな穴を開ける。

曲がることの出来ない銃弾は、ただ虚空を通りすぎるだけであつた。「いやあ、少し驚きですねえ。まあ、予想は出来ていましたが、実際に見てみると、違うものです。まあ、でも、これで終わりなわけがないじゃないですか。」

そう言うと、通り過ぎた銃弾にかけた魔法が発動する。銃弾にかかる方向ベクトルの転換。これが、すべてを組み替える。通り過ぎて、本来当たることのない銃弾に永遠の価値を与える。

そして、魔法により、向きを変えて、なおも進み続ける銃弾は化け物の背中を射抜くルートに行く。

速度は銃弾が通り過ぎたときと同じ速度のまま。

そうして、直前にいたったとき、突然、銃弾は巨大な球体へと姿を変える。だが、それも一瞬で、すぐに、化け物を飲み込むと、圧縮され、元の銃弾ぐらいの大きさまで縮まる。

これが、第二の魔法、物質魔法だ。物質の構成、密度、体積、すべてを自由に変える魔法。そう、人には扱ふことの出来ない、人であることをやめた僕が使える魔法の一つ。

そして、その銃弾形状をした化け物を圧縮したものを手に取る。これをしたのには、もちろんわけがある。

化け物は本来死にはしない。

ただ、肉体が死ぬだけだ。また、その化け物の魂に見合う肉体があれば、化け物はそれに宿る。

だから、結局のところ、化け物というのはこういうふうにして、完全に封じてしまうのが一番なのだ。つまりは、封じていない東の方は、これから数百年が過ぎた未来で、転生してくるのだ。今の時代に迷惑はかからないが、先の者たちにそれを負わせるのは酷だと思

う。

だが、はっきり言って、今回の化け物に関してはそうはいかなかった。俺の場合は別だが。だが、俺の弟子であるあいつら二人にはまだ早かった。さすがに、あいつら二人でも封じるほどの余裕がなかったのだろう。

まあ、表面的には余裕な感じであつたのだが。よく見てみると、あの世界では、余裕がなかったのが、想像が出来る。

「さて。ここまで、攻めてきたのは、おそらく、やつらの化身だ。戦っている分には分からないだろうが、封じてみて、調べてみると分かる。はたして、どうしたものかな。ミラ、アリシア。」

そう言つて、自宅に招き入れた二人に問いかける。

「現実では圧倒できたがな……。さすがに、あいつは無理だった。あれが化身だつてのかよ。かなりやばいな。」

「久々に、やばい状況まで追い詰められましたね、やつが化身だというのですか。一体、本体は……。」

「確かに。僕自身、あれが化身だったことには正直驚かされた。そして、化身であるにもかかわらず、街は半壊、そして、城まで突破されそうになったとなると……。そして、おそらく、やつらの目的は勢力調べ。僕たちはマークされたね。というわけで、これから、しばらく、僕と君たちとで行動を共にするよ。一人より、三人の方がいいだろうしね。」

「ですね。その方が安心ですし。」

「ああ、こつちも異論はない。じゃなけりや、まずいしな。」

そして、窓の外を見る。見ているのは、青く青く透き通った空。

「彼なら、どうするのだろうかね。」

封じるべきもの（後書き）

今回、作者の都合で、先週、更新が出来ませんでした。
すみません。

一応、今週から、一週間に一度のペースで再開できそうです。
これからも、よろしく願います。

また、感想等ございましたら、よろしく願います。

目の前に広がる現実

「さて、マリアと一緒に逃避行というのもいいわけだが、やつらからは逃げられないだろうなあ。マリアと親父が戦って、ギリギリだった相手だもんなあ。」

俺は悩んでいた。

正直なところ、国が滅びるとか、人が死ぬとかはどうでもいい。俺も一人の人間。人間はこの世界のすべて、いや、見えるもの全てを守ることを出来ないのだ。

出来たとしても、身の回りの人間を守ることだけ。

どんなに頑張っても、人間という枠に収まっている限り、不可能なことって言うのが付きまってくる。

だからこそ、人は出来ることから始めるのだ。

「まあ、とりあえずは防御一方かなあ。素直に敵に突っ込んでいくような状況じゃないし、俺は救世主とかそこらへんじゃないからな。」

「クッスーはそれでいいの？」

「それでいいも何も、俺にはこれしか出来ないんだ。だから、仕方がないんだよ。人は弱い。目の前のものさえきちんと守れないほどにね。そう、俺はそれをあの世界で何度も経験した。殺されて、マリアの運命を変えられずに死ぬなんていうことをさ。」

そう言っつて、窓の外に見えた雲が出てきて、暗くなり始めた空を見る。それは、俺の心にはびこるあの頃の無念といったものを映し出しているようにも見えた。

そう、あの世界は俺に、俺の無力さ、そして、人の弱さという現実をたたきつけた。それが、良かったのか悪かったのかは分からないし、答えを知るものなんていない。

「とは言っただものの、この世界でもう、安全なところもなさそうだし、目をつけられた可能性があるとなると、かなりやばいだろうな。」

「これが現実。なら、俺には俺の役割がある。この現実に対しての。だが、まだだ。まだその段階ではない。動き出すには速すぎる。あせっては駄目だ。」

あせらず、少しずつこの世界に対して、いや、この壊れた世界の現実に対して向き合わなければならぬのだ。

「とりあえず、ここは俺たちで防衛する。ここに、結界をしく。それで、動くべきときまでの時間を少しでも稼ぐ。これから、忙しくなるぞ。」

「ええ、そうしましょ。」

結界程度で防げる相手とも思えはしない。所詮、人が作りあえたものだ。人は一定のラインを超えることが出来ない。

だが、この世界に誕生した化け物どもはそれを超えることが出来る。だからこそ、恐ろしい。

だとしても、俺は臆したりはしない。もう、あの世界のように、失敗が許されはしないのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8968v/>

メフィストの夢

2011年11月14日06時07分発行